

リージョナルステート研究委員会の活動報告

地域主権分科会 幹事長 中 田 光 治

1. はじめに

今回、光栄なことに私たちリージョナルステート研究委員会（以下 RS 研と略称させていただきます。）の最近の活動に関して報告する機会を与えていただきました。本会会員の皆様の中には RS 研について「何やら怪しげな連中が、訳の分からない活動をやっているようだ」というお考えをお持ちの方もいらっしゃるかと思います。こうした誤解を払しょくするために、今回編集委員会のご厚意によりいただきました貴重な報告の機会を活用させていただき、私たち RS 研の活動状況、今年 6 月開催の臨時総会等を中心に報告させていただきたいと思えます。

2. 発足の経緯

RS 研の発足ですが北海道の自律と活性化を目指し、今から 15 年ほど前の平成 11 (1999) 年に設立し活動を開始しました。設立の趣旨は、北海道が自律していくために、私たち技術士が何をなすべきかを自問し、私たちができることから行動に移していくという能動的な理念と具体的な活動を原点としています。なお、リージョナルステートの意味ですが地方国家という意味です。

RS 研は平成 11 (1999) 年 4 月の北海道技術士センターの定例総会で設立が承認され、同年 8 月 19 日に設立総会を開催し、技術士 41 名でスタートしました（当時、私は東京で勤務していましたので、このような動きは知りませんでした）。RS 研の設立時の具体的な活動の目的として次の 4 項目が掲げられたそうです。

- | | |
|---------|-----------|
| ① 経済の自律 | ② 地域特性の主張 |
| ③ 地方主権 | ④ 国際貢献 |

この提言と実行を目的とした新しい技術士像を確立する活動の場として、活動のテーマごとに次の 4 つのグループが立ち上げられました。

- ① 自然科学分科会（座長：池田晃一氏）
- ② 観光分科会（座長：花田真吉氏）
- ③ 循環技術システム分科会（座長：船越元氏）
- ④ 自立的地域構造研究分科会
（座長：太田清澄氏）

その後、RS 研の分組織体制は、紆余曲折を繰り返しつつ、社会経済情勢のニーズに柔軟に対応するとともに、私たち技術士自身が動きやすく、活動を活発化させることを模索しつつ組織改革、改善を繰り返してきました。その結果、平成 26 (2014) 年 8 月現在、RS 研の組織は、設立当初から存続している循環技術システム研究分科会と平成 16 (2004) 年に設立した地域主権分科会の 2 つの分科会で構成され、現在も協力・連携を合言葉に積極的に活動を継続しています。その構成メンバーは、二つの部会を合わせますと 75 名になり、本会でも有数の参加者を抱える勉強会団体となっています。

3. 構成メンバー

平成 11 (1999) 年に設立された循環技術システム研究分科会は、毎年講演会、環境関連施設の見学会、幹事会、定例会等を開催しています。本分科会の会員数は平成 26 年 8 月現在 39 名で、技術士の登録部門構成は、総合技術監理部門が最も多く 19 人、以下、建設部門 15 人、衛生工学部門 9 人、農業部門 4 人等登録延べ人数 60 人で構成されています。機械部門、電気電子部門、情報工学部門など多様性のあるメンバー構成が、私たち循環技術システム研究分科会の特色となっています。

次に、平成 16(2004)年に設立された地域主権分科会ですが、当分科会も同様に毎年講演会、定例会、意見交換会等を開催しています。本会の会員数は、平成 26 年 8 月現在 36 名で、技術士登録部門は建設部門が 25 人と最も多く、次いで総合技術監理部門 14 人、上下水道部門 10 人、その他農業部門、森林部門等延べ登録部門数 54 となっています。さらに、会員を職場別にみますと国及び道庁が 10 人、市役所が 6 人など官庁に勤務している技術士の方が多いことも、当分科会の特徴の一つとなっています。

表-1 循環技術システム研究分科会の会員の技術士登録部門

番号	登録部門	人数	構成比(%)	備考
1	機械部門	3	5.0	
2	建設部門	15	25.0	
3	上下水道部門	3	5.0	
4	衛生工学部門	9	15.0	
5	農業部門	4	6.7	
6	森林部門	3	5.0	
7	環境部門	2	3.3	
8	総合技術監理部門	19	31.7	
9	その他	2	3.3	電気電子、情報工学
	合 計	60	100.0	

※ 実人数は 39 名

表-2 地域主権分科会会員の技術士登録部門

番号	登録部門	人数	構成比(%)	備考
1	建設部門	25	46.3	
2	上下水道部門	10	18.5	
3	農業部門	2	3.7	
4	森林部門	1	1.9	
5	総合技術監理部門	14	25.9	
6	その他	2	3.7	電気電子、生物工学
	合 計	54	100.0	

※ 実人数は 36 名

表-3 地域主権分科会会員の職場別属性

番号	職場	人数	構成比(%)	備考
1	国、道等	10	27.8	
2	市役所	6	16.7	
3	大学・公益法人	1	2.8	
4	民間(ゼネコン)	3	8.3	メーカー含む
5	民間(コンサルタント)	16	44.4	
6	その他	0	0.0	
	合 計	36	100.0	

4. 平成 25 年度の活動内容

RS 研で平成 25 年度に実施した事業は、次の通りです。私たち RS 研は二つの分科会を構成して活動しています。この趣旨は「北海道の自律と活性化」という共通の目的に向かって異なった視点、スタンスから専門技術者としての研究、評価を行い、そのうえで協力・連携して課題を克服していこう、との考えに立脚したものです。従いまして、最近では RS 研の行事として、二つの分科会が協働で講演会や通常総会等を積極的に開催しています。また、広報活動の強化、情報の共有化等に心掛けています。

- 第 1 回定例会(循環) 平成 25 年 4 月 8 日
- 第 1 回幹事会(RS 研) 平成 25 年 4 月 11 日
- 第 2 回定例会(地域) 平成 25 年 4 月 19 日
- 第 3 回定例会(地域) 平成 25 年 5 月 24 日
- 第 4 回定例会(RS 研) 平成 25 年 5 月 27 日
- 第 1 回研修会(RS 研) 平成 25 年 6 月 28 日
- 第 5 回定例会(循環) 平成 25 年 8 月 5 日
- 第 1 回見学会(RS 研) 平成 25 年 8 月 23 日
- 第 2 回見学会(RS 研) 平成 25 年 11 月 15 日
- 第 1 回意見交換会(RS 研) 平成 26 年 1 月 27 日
- 第 2 回幹事会(RS 研) 平成 26 年 2 月 20 日

平成 25 年 10 月に日本技術士会の全国大会がありました。私たちの有志は実行委員会に参加し、その中で第 2 分科会「北海道が日本の未来に渡すもの」への参加を呼びかけ、さらに、JR 札幌駅コンコースで開催されたパネル展示にも参加したまし。私たちが作成・展示した 2 枚のパネルの内容は巻頭のグラビア写真に示した通りです。

以下、25 年度に実施した事業のうちの幾つかについてその概要を紹介します。

(1)平成 25 年度第 1 回研修会

平成 25(2013)年 6 月 28 日に、北海道開発局事業振興部機械課長(前釧路市副市長)の小松正明様に「釧路市における街づくりについて」と題してご講演をしていただきました。講師の小松さんは、地域主権分科会に所属している技術士で、建設部門に登録されています。

ご講演の中で小松講師は、私たちと同じ技術士の

目線で、北海道の地方中核都市の現状と課題、特に中心市街地の空洞化の実態、都市機能集約化の必要性、地方交付税に算定される都市施設、同算定されない都市施設、都市防災の必要性などについて、熱い口調で私たち会員に語りかけて下さいました。

なお、小松講師はご講演の最後に、ご自分で毎日、情報発信をなされているブログや印刷物についても、遠慮がちにご紹介していただきました。



写真-1 H25 第1回研修会の状況

(2) 平成 25 年度第 1 回見学会

平成 25(2013)年 8 月 23 日に「ほくでんエコエナジー株式会社」様が管理をしている虻田郡洞爺湖町周辺の 6 つの発電所を見学させていただきました。今回お世話になった「ほくでんエコエナジー株



写真-2 H25 第1回見学会(豊浦発電所の導水管路周辺の森林と一体化している風景)

式会社」様は、北海道電力株式会社の関連会社で、現在この洞爺管理所のほか道南、日高、道北、道東等 5 つの管理所で、合計 17 か所の発電所の運転・保守・管理を担当している会社です。

今回見学をさせていただいた発電所は、洞爺管理所管内の豊浦、久保内、洞爺、壮瞥、虻田の 5 か所の発電所でした。豊浦発電所を除く 4 か所の発電所は、いずれも大正から昭和 20 年代にかけて建設された古い発電所で、その分周辺の国立公園の風景と相まって美しい景観を演出しています。また、北海道のエネルギー供給の点でも、虻田発電所の最大出力 19,500kW など、多大な貢献をしています。

(3) 平成 25 年度第 2 回定例会

平成 25(2013)年 4 月 19 日に滝川市総務部財政課長の高橋一美様に「滝川市における公共施設のマネジメントについて」と題してご講演をしていただきました。高橋一美氏は、地域主権分科会に所属している技術士で、現在滝川市役所に勤務をされています。

ご講演の中で、高橋講師は、現在、滝川市が行っている公共施設のマネジメント取組の経緯、その意義、インフラ・クライシス、同市公共施設の整備水準等についてお話をさせていただきました。その後、さらに現在策定されている滝川市公共施設マネジメント計画、同公共施設白書についてもお話をさせていただきました。最後にハコモノ指数やハコモノ削減率等の興味深い話で締めくくりをしていただきました。

なお、この講演会の写真は、巻頭のグラビア写真に掲載していますので、そちらも合せてご覧下さい。

5. 平成 26 年度の活動計画及び実績

平成 26 年度も既に半年が経過しました。4 月から 8 月まで 5 か月の中で私たちは、臨時総会、定例会や意見交換会などを精力的に開催してきました。

また、RS 研では 26 年度の事業として、4 月以降幹事会、定例会(3 回)等を開催してきました。ここでは 6 月に開催した臨時総会及び講演会、9 月に開催予定の北東 3 地域本部技術士交流研修会について報告させていただきます。

(1)臨時総会

平成 26 年度の総会ですが臨時総会として平成 26 年 6 月 20 日に開催しました。総会参加者は 22 名でした。総会司会は、滝澤嘉史 RS 研幹事長が担当し、最初に武智代表の挨拶がありました。その後、滝澤幹事長から平成 25 年度の RS 研の活動報告、会計報告、平成 26 年度活動計画等の報告がありました。

次に、阪豊彦 RS 研副代表で循環技術システム研究分科会代表から循環技術分科会の活動報告がありました。最後に、地域主権分科会幹事長の筆者から当該分科会の平成 25 年度活動報告等について報告させていただきました。これらの報告・審議事項は、参加者の満場一致で承認していただきました。

総会終了後、講演会を行いました。講師は、北海道大学大学院工学研究院 環境創生工学部門環境管理工学分野 循環計画システム研究室准教授の石井一英様をお願いいたしました。演題は「北海道における再生可能エネルギーの可能性」でした。石井一英先生は当該分野の第一人者であり、その先生のご講演内容ですが、日本では大震災後、再生可能エネルギーの風潮が高まりましたが、太陽光や風力等の発電に偏った施策が中心となっていることを危惧していられました。

そこで、北海道と気候条件が似たヨーロッパ諸国に目を向け、再生可能エネルギーといえばバイオマスのシェアが 1 位であることに着目されたそうです。ヨーロッパ諸国でバイオマスは、電気のみならず、熱や運輸燃料等、様々な形態として普及しており、それどころかバイオマスエネルギーのみで、エネルギーの自給自足をしている村さえあるそうです。

北海道は、再生可能エネルギーの宝庫と言われていますが、大量に賦存しているバイオマスエネルギーの利活用状況は、いまだ発展途上段階だと痛烈に批判をされていました。こうした事情を背景として、今後の道内各地域の特徴を活かしたバイオマスの利活用について「地域が元気になる」、「北海道が元気になる」、さらにこのような地域活性化の起爆剤となり得る可能性を秘めたバイオマスエネルギー

について、約 1 時間、熱い口調でご講演をしていただきました。なお、今回のご講演風景の写真は本誌のグラビア写真に紹介させていただいておりますので、そちらを合わせて参照していただければと思います。

(2)北東 3 地域本部技術士交流研修会

本年 9 月 5 日、6 日には新潟市で北東 3 地域本部技術士交流研修会が開催される予定であり、そこで本委員会幹事長の滝澤嘉史氏に RS 研の紹介や具体的な活動報告をしていただく予定です。演題は「人口減少と地域振興」で、発表の趣旨ですが、人口減少は確かに負の影響がありますが、何とかそれを逆手にとって新たな資源を生み出せないか、人口が減少することでプラスの効果が全くないのか等を提言し、人口減少で新たに生み出される資源を活用している市町村の事例紹介等をしていただく内容です。今後機会があれば、本会会員の皆様にも発表していただきたい興味ある提案になっています。

6. 終わりに

以上、RS 研の設立の経緯、最近の活動内容、今後の活動予定等について報告させていただきました。私たちの RS 研はオープンな会です。いつでも、どなたでもご参加を歓迎しています。最後になりますが、本会会員の皆様方の今後ますますのご発展、ご健勝さらには技術士の知名度の向上、社会への貢献を祈念させていただきつつ終わりにさせていただきます。このたびは、報告する機会を与えていただきまして、大変ありがとうございました。

中 田 光 治 (なかた こうじ)

技術士(建設/上下水道/農業/水産環境/総合技術監理部門)

リージョナルステート研究委員会
地域主権分科会 幹事長
株式会社東亜エンジニアリング
本社 執行役員技術顧問

